

スポーツ実技(山岳救助)		実習	准教授 古川 慎太郎 講師 清家 洋	
科目カテゴリー	救急救命士コースの教養選択科目	科目ナンバリング	13220203	

1. 授業のねらい・概要

本授業は日本国土の7割以上を占め、清流の生み、人の生活との深いかかわりを持つ山岳の環境学と、登山における行動学や医学的な観点を学び、山岳における初歩的な安全管理知識・技術、救助知識・技術の修得を図る。

2. 授業の進め方

基礎知識を修得するための座学、山岳環境における救助実技を中心とした授業展開を行う。

3. 授業計画

1. 山岳救助学総論 我が国の山岳環境の特徴、関係、事故について理解を深める。 2. 運動生理学 登山による呼吸系、循環、神経と筋・骨格などの生理学について理解を深める。 3. 動作論 歩く・跳ぶ・登る・下るといった登山動作について修得し、実践でも理解を深める。 4. 山岳心理論 山岳環境で起こる気象変化や体調変化による心理の変化を修得し、セルフメンタルケアも理解する。 5. リスク論 登山前や中に行われる「メディカルチェック」について修得し、山岳におけるセルフコントロールの理解を深める。 6. 山岳環境保全論 山岳の環境保全について修得し、人と環境の相互性について理解を深める。 7. 山岳環境適応論 山岳環境の生体影響について修得し、自然との環境適応について理解を深める。 8. 山岳行動論 登山・下山を行動学的な視点で動作的アプローチをし、行動評価の作成について理解を深める。	9. 山岳行動論 登山によるカロリー消費量について修得し、けがや事故を起こさない方法も理解する。 10. クライシス論 登山による疲労回復のための休憩について修得し、適切な方法や休憩時間について理解を深める。 11. エマージェンシー論 遭難時の適切な判断と行動について理解を深める。 12. 山岳救命学総論 登山中に発症する疾患と、主な原因について修得し、登山の可否助言、予防法や緊急搬送について理解を深める。 13. 山岳外傷論 登山中に起こる事故に伴う外傷について修得し、適切な予防法と対応法について理解を深める。 14. 山岳疾病論 登山で起こる疾患について修得し、適切な予防法、観察法と対応法について理解を深める。 15. 山岳特殊疾病論 山岳で起こる特殊疾患の特徴、原因、発症機序と症状について修得し、適切な観察法や対応方法について理解を深める。
--	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

適宜提示する事項に関する事前学習、授業内容の振り返り、資料整理、自主練習等を行う必要があり、各授業につき30分～90分程度を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

口頭や資料提示等により、個別または授業中の講義を通じて行う。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 山岳救助活動における安全管理の重要性について理解を深める。
- 2) 山岳救助活動を行う上で必要となる基礎知識・技術を身に付ける。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（50%）および授業で実施する想定訓練における活動状況（50%）により評価する。

なお、平常点は、授業態度・積極性・協調性・判断力・行動力等を踏まえて総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

適宜指定する資料

9. 受講上の留意事項

- 1) 安全管理の徹底を要する実技項目があるため、教員の指示に従って統率の取れた行動をとれる学生のみが受講すること。
- 2) 以下に該当する場合は、当日授業を欠席扱いとする。
 - a) 実習に相応しい身だしなみ（アイロンがけした制服、黒色または紺色のTシャツ、黒色または紺色の靴下、汚れていない内履、及び名札の着用）が履行できない場合。
 - b) 長い爪、髭、過度に明るく染色した頭髮、アクセサリーの着用等、社会通念上医療従事者として活動に従事する上で、相応しくないと認められる場合。
 - c) 使用するテキストや資料、個人資器材、その他授業に持参するよう指示した物品を忘れた場合。
 - d) スマートフォンなど音の出る電子機器については、電源を切ることを原則とし、これに従わない場合。
 - e) 居眠りや落ち着きのない言動等、授業の円滑な進行を妨げると教員が判断した場合。
 - f) 授業開始 10 分前までに事前連絡がない遅刻、及び 30 分以上の遅刻。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は、公的機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。